

研究
テーマ

英文読解の授業展開と発話構造の研究 —ビリーフと指導法の関連に焦点を当てて—

◆キーワード

英文読解 発話分析 認知心理学

◆産業界の相談に対応できる分野

教育方法の改善 校内研修の充実

大学教育センター 准教授

野村 幸代

TEL 0294-38-8488

e-mail s-nomura@mx.ibaraki.ac.jp

一言
アピール

本研究は、高校における英文読解授業の発話構造を解明し、授業改善や教師教育の向上、校内研修の充実に役立ちます。

研究概要

本論文は、授業分析に基づいて、高校における英文読解の授業展開と発話の特徴を明らかにすることを目的としている。

本研究の背景となる英語教育学研究の課題は、第1に、理論に基づいた実践の分析の蓄積がなく、実証に基づく指導理論が発達しないこと、第2に、英文読解のプロセスは認知心理学に基づいているが、認知心理学に基づいた読解授業の分析が行われていないため、実際の授業において、読解のプロセスがどのように展開されているのかは不明であること、第3に、授業分析は、教師の授業改善のために行われることが多いため、教師の発話分析に焦点が当てられ、生徒の反応は軽視されてきたため、授業分析が一方からの視点となっており、立体的に授業を検討するためには、生徒の発話分析も併用する必要があること、第4に、実践は教師のビリーフの影響を多大に受けていることが先行研究で指摘されているが、実践とビリーフの関係を具体的に論じた研究は稀であり、実践とビリーフの関係をより明確に描くことは、教師教育の向上のために必要であることが挙げられる。

本研究では、同じテキストを扱った3人の教師の授業を多角的に分析する。発話率や発話機能に関しては、CARES-EFL(金田, 1984)を用いて分析を行うことができる。しかし、授業展開や発話内容を分析するためには独自の分析方法を開発する必要がある。本研究では、次の2つの分析方法を開発し

た。第1に、授業展開の分析に関しては、「言語単位」という新たな分析単位を提案し、それを時系列に並べることにより、認知心理学の読解プロセスに基づく分析を行った。第2に、発話内容は、授業の逐語記録を定性的に分析し、内容に基づいてコードを設定することにより、定量的に分析した。定性的要素を定量的に分析する方法の開発は、柴田(1999, 2002)の理論に依拠した。

本研究の結論は次の2点である。第1に、授業展開はボトムアップとトップダウンを好む場合があり、それは教師の英文読解に関するビリーフの違いによって異なる。第2に、授業の発話機能と内容は、教師の授業に関するビリーフによって異なる。授業に関するビリーフは「英語の授業の在り方」と「生徒」に関するものとの2つに分けられる。「英語の授業の在り方」は英語の使用量や発音指導の有無として授業に顕在しており、「生徒」に関するものは、質問の使用率や、生徒の背景知識や個人知識を問う発話内容として顕在化していた。研究の蓄積により、教師の読解授業構造モデルを体系化できるか、という点である。読解授業構造モデルを体系化できれば、教師教育の向上に貢献できると考える。

何に
使える?

小学校、中学校の英語教育の授業分析を行い、授業研究や校内研修に利用できます。 または、応用、発展が可能です